慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本における宗教性と歴史認識に関する研究 : 鵜祭の変容と能登の地域史の変容
Sub Title	
Author	市田, 雅崇(Ichida, Masataka)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2003
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.56 (2003.) ,p.105- 108
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成14年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000056-0105

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

のもフェイズ3での反応に強く影響し，このことがVIの下で特徴的に見られる一定反応率をフェイズ3で生み出したと考えられる。一方，第2条件ではフェイズ1での強化率がフェイズ2での強化率の4倍であったため，フェイズ3では反応がハウスライトの提示によってより強く制御されたと考えられる。また，第2条件では第1条件よりも12倍長いブラックアウト期間をハウスライト提示の合間に設けたが，自動反応形成手続きを用いた先行研究などではこのような期間が長いほど条件づけが早く進行することが分かっており（例えば，Gallistel & Gibbon, 2000を参照），このことによってもハウスライトの効果が強くなったと考えられる。ただし，第2条件のフェイズ3で得られた反応率は非常に低かったため，結果として得られた反応パターンは偶然に生み出されたものである可能性もある。そのため，今後さらに多くの被験体を用いて被験体I12で見られた反応パターンがどの程度確実に得られるかを検討する必要がある。

また，実験者が実験中の被験体の行動を一時的に観察したところ，FTハウスライトの下では，しばしばハトがハウスライトに頭を向けていた。また，給餌器の開口部に頭を入れて強化子提示を待つ行動も多く見られた。第1条件では4羽全ての被験体でFTよりもVTと結びついたハウスライトの下で高い反応率が得られたことには，このようなキイつつき以外の行動が関係していた可能性もあるため，今後は行動観察を組織的に行う必要がある。

引用文献

Dews, P. B. (1970). The theory of fixed-interval responding. In W. N. Schoenfeld (Ed.), *The theory of reinforcement schedules* (pp. 1-42). New York: Appleton-Century-Crofts.

Gallistel, C. R., & Gibbon, J. (2000). Time, rate, and conditioning. *Psychological Review*, **107**, 289-344.

Morse, W. H., & Skinner, B. F. (1958). Some factors involved in the stimulus control of operant behavior. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior*, **1**, 103-107.

Staddon, J. E. R., Chelaru, I. M., & Higa, J. J. (2002). A tuned-trace theory of interval-timing dynamics. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior*, **77**, 105-124.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科心理学専攻博士課程

日本における宗教性と歴史認識に関する研究

—鵜祭の変容と能登の地域史の変容—

市　田　雅　崇*

はじめに

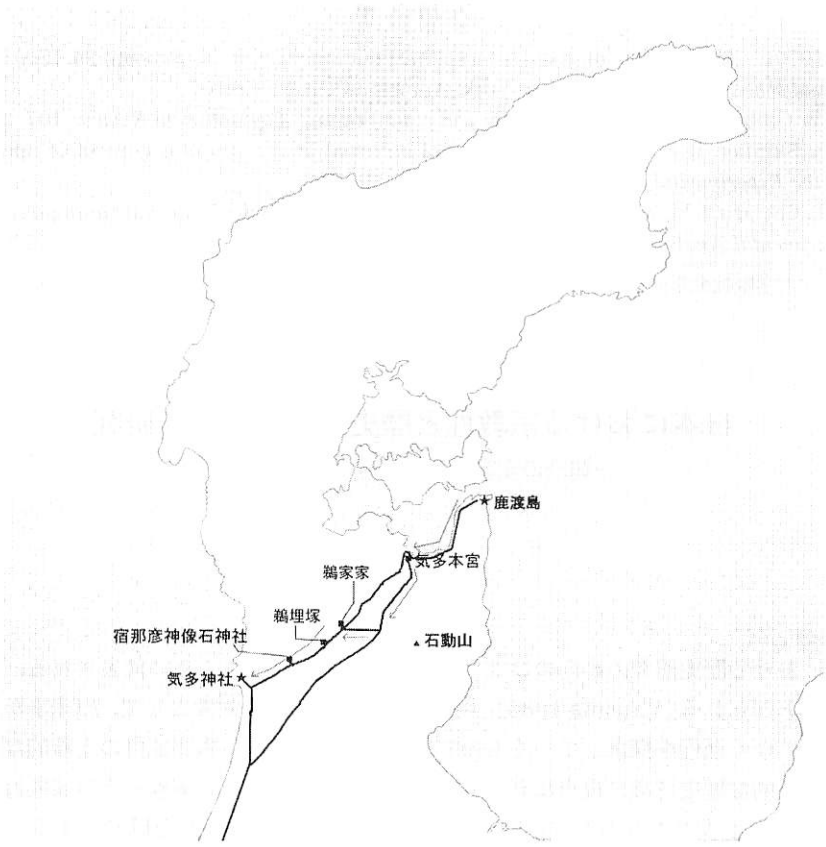
文化人類学における歴史研究の動向のひとつとして，ヤン・ファンシナに代表される，無文字性からの歴史の考察があげられる[Vansina 1985]。現前に変容する社会を対象として，出来事から歴史意識が形成され定着してゆく過程を探求していくものである。本研究では，集団独自の土着的な歴史観というエスノヒストリー的な歴史認識の視点に立って，地域の宗教性を有する事象とその表象行為としての儀礼を取り上げ，歴史生成のあり方を民俗社会のレベルから考察することを目的とする。エスノヒストリー的な歴史認識の視点とは，各々の集団は「コスモロジー，叙述，儀礼や儀式，そしてより一般的に

はネイティヴな哲学や世界観に埋め込まれたネイティヴな歴史理論」を持っている.という視点である[Fogelson 1984: 134-135]。

以上をふまえ本研究では，地域における個々の集団，およびそれを取り巻く多様な環境・生活と，歴史観とその再演とに焦点を当てる。そして集団特有の歴史観が他集団との競合の中で，集団的に大きなレベルの歴史観のなかにどのように連続性を持って位置を占め，自分たちの歴史観として布置していくのかを考える。これまで継続的にフィールドワークを行ってきた石川県能登地域において，「鵜祭」という儀礼を対象としてフィールドワークを行った。

鵜祭は 12 月 16 日早朝，気多大社（石川県羽咋市）で行われる。七尾市鵜浦の鹿渡島で捕獲した鵜を，鵜捕部が鵜籠に入れて気多神社まで参向し，神前での神職と鵜捕部の問答ののち，鵜を放ち，本殿内の神鏡前の案上にとまると取り押さえ，その鵜の動きで吉凶を占う神事である。鵜はそのまま抱きかかえられて，一宮の海浜に放たれる。ここでは，鵜浦における鵜捕神事から気多大社での神事に至る一連の儀礼の過程を鵜祭と呼ぶことにする（地図参照)。

この鵜祭に関する伝承はこの地域で多く見られる。例えば，気多本宮では鵜様と鵜捕部を迎えて新嘗祭が行われる。このとき神前には，スズヒコ神，ヘクラ神，タケクラ神，気多神が召され，各神に応じて舳倉（輪島）の鮑，能登部の稲穂（柏餅)，鹿渡島の鵜，という神饌を供え，能登国の新嘗祭と位置づ



鵜祭概要

けられている。また，鵜が参向する道中である鹿西町金丸には鵜石と呼ばれる石があり，かつて卜喰の神事が行われていた。現在も鵜捕部一行はここで一休憩する。また，海に放たれた鵜は，信州諏訪神社あるいは越後能権現に飛んで行くとも伝えられる。

このように，鵜祭は主体となる担い手としていくつか集団が考えられるが，ここでは鵜捕部に焦点を当てる。鵜捕部とは七尾市鵜浦で鵜を捕らえ，気多大社まで参籠する人たちのことで，近世以来21戸あったが現在は20戸，鹿渡島の旧家であり，鹿渡島はもともとこの21戸からなっていたといわれる。鹿渡島は崎山半島の北端に位置し，東は富山湾，西は七尾湾，北は小口瀬戸を隔てて能登島と接し，三方を海に囲まれた場所である。鵜捕部は環境に即して，海からとれるものと陸でとれるものとで生活する，半農半漁の自給自足の暮らしであった。明治27年，気多神社より改めて鵜捕部に任ぜられた。鵜捕部は「うっとりべ」と呼ばれ，鵜は「鵜様」と呼ばれその行動は敬語で表わされる。現在では小西家が明治20年に気多神社から鵜捕の主任を命じられて以来，現在に到るまで鹿渡島の観音崎の鵜捕崖と呼ばれる断崖で，一子相伝の方法により鵜を捕獲する。

その由来とは，昔，気多神大己貴命が天下を巡幸して妖賊を誅討しているとき，高志の北島から船で神門島についた。鹿渡島の御門主比古神（現在でも鹿渡島の氏神）は鵜をとらせて大己貴命に饗した。これ以来，鹿渡島の岩壁にすむ鵜を捕らえて毎年気多神社に奉献する，というものである。この鵜捕部の持つ由来が，自分たちの集団がなぜこの地に住んでいるのか，そして鵜祭を再演することによって集団を維持してきたのかを説明している。

考　　察

前述したように，この地域には集団によってそれぞれ独自の歴史観があり，鵜祭という儀礼を介して束ねられている。そのとき，鵜祭にまつわる自分たちの行為・実践の基づく歴史観は，上位の抽象化された能登平定譚としての「鵜祭の歴史」とそれに位置づけられた集団独自の歴史観とであって，ほかの集団の歴史観には認識がない。つまり抽象度が高められた能登平定譚としての「鵜祭の歴史」を，自らの歴史観に引き寄せて解釈し，実践しているのである。

海に突き出て海流が当たる能登地方の神に関わる伝承は，神が海から流れ着いて漂着したというもの，あるいは海からやってきた外来の神が土着の神の助けを借りて土地を平定するところに特徴がある。鵜捕部の奉じる御門主比古神も，外来神である気多神を助け平定するという能登地方に特徴的な叙述の線的構造を共有している。王権の外来性は一般的な特徴であるが，能登の場合では気多神という固有性をもった神に帰着され，鵜捕部の歴史観は地域的に共通したもののひとつのヴァリエーションと見なせる。

鹿渡島には鵜田と呼ばれる鵜捕部の耕作する田がある。これは前田利家によって，天正13年，戦乱のため絶えていた鵜祭を再興するために，鵜捕部21戸に対し鵜田3石を与えられたものである。現在も20戸のうち4戸一組が当番で順番に毎年耕作している。鵜捕部の家の順番は決まっており，鵜を気多大社に参籠する順番もこの組み合わせからなる。毎年当番に当たった3戸からそれぞれ1人ずつ出て，鵜様を奉じて参向し鵜祭は再演されている。能登では，ムラを単位とした氏神祭祀の氏子組織と，家を単位とした仏教寺院の檀家制度の両面に支えられているが，鵜祭に関わるこのような仕組みは，ムラの神社の維持管理とりわけ祭祀組織は氏神祭祀を氏子が当番制で行うという能登の信仰基盤の特徴と共通する。

ま と め

以上のように，集団独自の歴史観とその再演は，集団に特有な他とは矛盾をきたす歴史観を有するが，それは能登の地域的な共通性を持った背景基盤の中に埋め込まれている。主体としての担い手は，より広い文脈におかれる自らの宗教・文化・社会的背景を基盤として，集団に特有な鵜祭に関する諸事項を解釈し実践し，集団独自の歴史観として編集・保持しているのである。

地域的な共通性は，各々の集団が持つ歴史観を集約し，より大きなレベルの集団の歴史観としてまとめ上げ，また逆に各集団の独自の歴史観を再解釈・再編集する回路となっている。こうして，エスノヒストリー的な集団独自の歴史観は，潜在的共通性を通じて集団的により大きな歴史観と結びつくと言える。

この歴史認識は，集団内に存在する限りにおいて意識の度合いは低い。しかし外的要因によって他の歴史観と衝突・融合するとき，意識化され表出される。鵜祭は平成 13 年，「気多の鵜祭の習俗」として国の重要無形民俗文化財に指定されたが，このとき担い手の指定をめぐり，鵜祭を保持し演じてきた鵜捕部が異議を唱えている。今後の課題として，現代的状況における国家とのかかわりの中で，歴史観がどのように意味づけられ変容してゆくのかをミクロな民俗社会のレベルから考察してゆきたい。

参 考 文 献

Fogelson, Raymond. 1984, The Ethnohistory of Events and Nonevents. *Ethnohistory* 36.
Vansina, Jan. 1985, *Oral Tradition as History.* University of Wisconsin Press.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程

社会的現実（リスク認知を含む）の構成とマス・メディア

大　坪　寛　子*

は じ め に

社会的現実とは，人びとの知識によって構成された意味世界としての現実のことである。であるから，あるリスクに対する認識も，リスク概念そのものも，外国人に対するイメージも，ある社会集団を構成する人びとの相互主観性に基づいた社会的現実であると言える[1]。

こうした社会的現実，つまり常識のような形で共有される知識が構成されていく過程について，Berger and Luckmann (1966=2003) は，「外化」「対象化」「内在化」の絶えざる弁証法的過程であると述べた。彼らは，この過程に介在するマス・メディアの働きについては考察していないが，一般に，直接経験の乏しいことがらについては，マス・メディアの影響力が大きくなることが知られている (Weaver et al., 1981; Morgan & Signorielli, 1990; McCombs et al., 1991)。たとえば，身近にはまだ発生していない危険事象に対するリスク認知や，日本人が直接接触する機会の少ない国や地域についての認識やイメージは，特にマス・メディアの影響を受けやすいと言えよう[2]。

人々の現実認識に影響を及ぼすマス・メディア（特にテレビ）の機能に着目し，検討したものに Gerbner らの培養理論 (Cultivation Theory) がある。培養理論では，その実証研究の中で用いられる典